

# 上智大学言語教育研究センターにおける 初習5言語による Language Exchange の試み ～フランス語ケースの分析～

Essai de « Language Exchange » en 5 langues par le Centre d'études et de recherches des langues à Sophia : analyse du cas du français

北村亜矢子	西川葉澄
KITAMURA Ayako	NISHIKAWA Hasumi
上智大学	慶應義塾大学
akitamura?q04.itscom.net	nhasumi?sfc.keio.ac.jp

## 1. はじめに

上智大学では2012年度に、それまでの「一般外国語センター」に代わって、上智大学全体の語学教育の立案、実施を行う組織として「言語教育研究センター Center for Language Education and Research」（以下CLER）が始動した。

CLERの大きな役割の1つは、学生に語学の授業を提供することで、上智大学ではヨーロッパ、アジア、アフリカ言語にわたる全22の言語を学ぶことができる。また、CLERのホームページでは、主要な言語の授業内容や履修モデル、検定試験を紹介したり、その言語が話されている国や地域の文化を紹介するなど、学生に様々な情報を与えている。

CLERのもう1つの大きな役割は、学習支援である。語学学習には、授業だけでなく授業外学習も大切であるという考えから、CLERは、学習支援を目的としたLLC (Language Learning Commons)を企画運営している。

LLCの主な活動には、学部3、4年生や大学院生、あるいは留学生がリーダーとなって大学1、2年生を対象に会話のグループセッションを行う「外国語コミュニケーショングループ」（初習言語）や、専門のアドバイザーからサポートを受ける「学習アドバイザー制度」がある。また各言語の書籍やDVDを閲覧するコーナーもあり、年に数回学生を対象として文化的コンテンツのシンポジウムや講演会なども開催されてきた。

## 2. Language Exchange

外国語を学習する際に、その言語の母語話者と実際にコミュニケーションをとることは、発話や聞き取り能力を高めるだけでなく、学習意欲を高める大きな刺激となる。しかし、日本に居ながらそうした体験をする機会は非常に限られている。そこでLLCでは、日本語学習者である留学生と、その留学生の母語を学習している学生が、当該言語か日本語のみにより交流するLanguage Exchange (以下L.E.)を企画し、留学生との交流と学習言語実践の場の提供を試みた。2015年度から開始したL.E.では、初習5言語（フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語、韓国語）のセッションが月～金曜日の昼休みに日替わりで行われた。2015年度は実験的に春学期に1回（5月）、秋学期に1回（11月）のペース、2016年度からは前年度の実績を踏まえ、春

学期に4月を除く毎月1回、秋学期も同様のペースで開催した。CLERオフィスの担当職員2名から毎回開催時にサポートが得られたことは大きな助けになった。

### フランス語の場合

		事前登録	抽選	事前グループ分け	語学レベルによるマッチング	留学生協力者	TA	参加人数 (留学生)	参加人数 (学習者)	留学生と学習者の比率
1	2015 春	○	○	○	○	×	サークルの学生	6	18	1対3
2	2015 秋	○	×	×	×	×	言語チューター	16	8	2対1
3	2016 5月	○	×	×	×	○	言語チューター	5	19	1対3.8
4	2016 6月	×	×	×	×	○	言語チューター	2	11	1対5.5
5	2016 7月	×	×	×	×	○	言語チューター	4	10	1対2.5
6	2016 10月	×	×	×	×	○	言語チューター	5	19	1対3.8
7	2016 11月	×	×	×	×	○	言語チューター	4	11	1対2.8
8	2016 12月	×	×	×	当日レベル自己申告	○	言語チューター	3	19	1対6.3

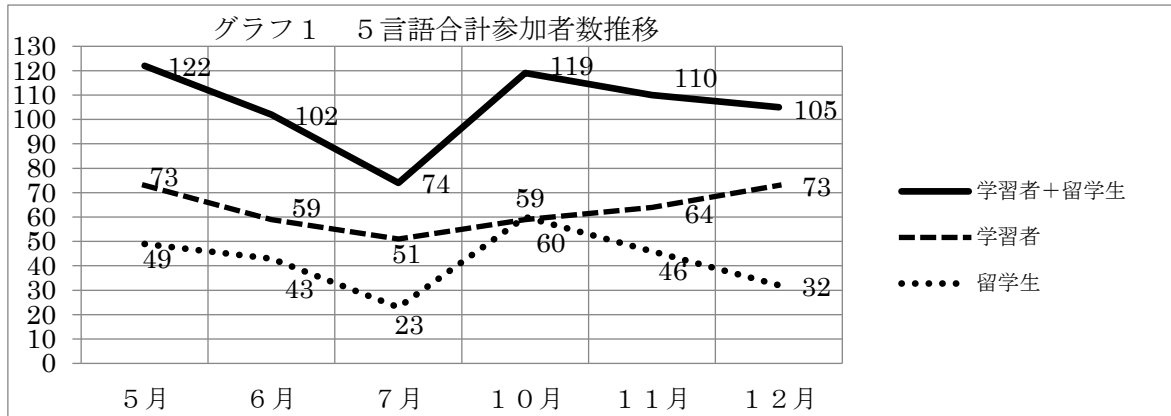
- 募集方法：他の言語同様、毎回上智大学のwebサイト「Loyola」で2週間掲示を行った。
- 事前登録：パイロットスタディーとして行った2015年度の2回と2016年の初回のみLoyola上で事前登録が行われた。
- 抽選及びグループ分け：初回（2015年春）のみ、留学生と学習者の比率を適正に保つために優先順位（CLERの授業を履修している学生、1、2年次優先等）を設けて人数調整を行った。しかし、2回目以降は優先順位を撤廃し、どの学生も制限なく参加可能とし、人数調整も行わなかった。また、初回のみ、語学レベルを考慮したグループ分けを行ったが、その後は語学レベルを考慮せず、留学生をバラバラのグループに分け、来た学生から適宜グループに入ってもらった。しかし、留学生からの希望があり、最終回のみ当日の自己申告制でフランス語学習者に初級、中級、上級のグループに分かれてもらった。
- 協力者：2016年度は、留学生の参加者が少ないことを懸念して、学内の留学生担当部署から推薦してもらった留学生にコンタクトを取り、お弁当を出す条件で参加者を募った。秋学期は、3回連続参加を条件に協力者を募り、3名の協力者を得た。
- TA：当日の司会進行を担当。2016年10、11、12月は、熱心なフランス人が担当し、L.E.終了後に留学生を集めてヒアリングを行ったり、留学生が足りない時は自らグループに入って会話を盛り上げる等、積極的にL.E.の運営に関わった。
- 宣伝：フランス語学習者に関しては、参加者が増えすぎることを懸念して専任教員のクラスでのみ情宣を行った。留学生に関しては全クラスで行い、前日にはリマインドメールを送り、更に当日午前中の日本語の授業で教師から呼びかけを行った。また、L.E.の直前には、LLC前でフランス語のCDを流しながら呼び込みを行った。
- 内容：初回は初対面でも楽しめるよう、フランス語の質問が盛り込まれたすごろくを用意した。異文化発見型の質問を多く用意したが、1年生の参加も想定した簡単な質問もあればよかったという反省を得た。「楽しかったが、（フランス語は）できなかった」よりも「（できなかったが）楽しかった。また来たい」という体験を目指し、季節的な話題、互いの内面を話す質問（好きな音楽や料理、地元紹介、将来の夢等）など、用意する質問に関して試行錯誤が続いた。自由に話せない学生の対策として、どの母語の参加者も対等で、共に教え合い助け合うという理念をもとに「教え合い」を取り入れた。伝統文化についてなど難しい話題ではなく、普段よく使うが教科書にはない表現を教えあう程度とした。2016年からは、用意した質問は話

題がない時のみ適宜使うこととし、秋学期からはさらに教員の介入を最小限にし、参加者のフリートークを目指した。

### 3. 2016年度の結果

#### 3.1. 参加者数推移

本格的に始動した2016年のL.E.の参加延べ人数は622人、留学生を除いた当該言語学習者の延べ人数は379人であった。従って参加者内訳は、学習者が6割、留学生が4割であった。

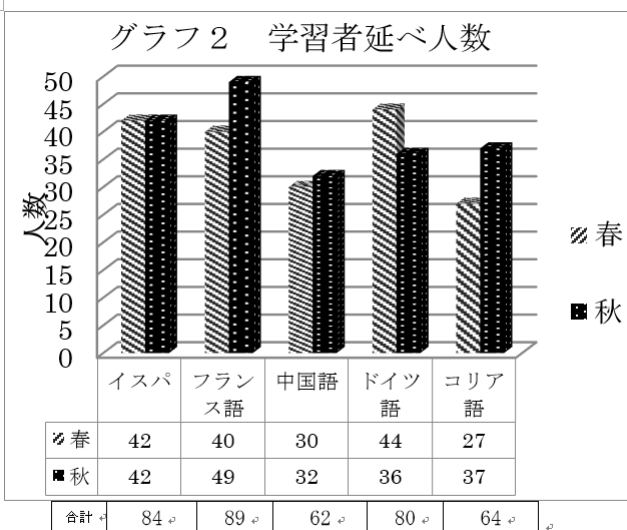


月別に見ると（グラフ1）、学習者と留学生を合わせた参加者数は、5月が最多で、6月、7月と大きく減少していった。しかし、10月には再び初回並みに参加者が増加し、その後は多少の減少は見られるものの、春学期に比べてある程度参加人数を維持できたと言える。

学習者と留学生を比較すると、学習者の方が増減が少なく、より安定していると言える。また、春学期には両者とも参加人数が減少していったが、秋学期には、11月以降留学生が再び減少していったのに対し、学習者は逆に増加していったのが特徴的である。春学期の学習者減少は、5月に参加した初級レベルの学生が語学力不足から期待したほど交流が図れず、6月の参加を見合わせたこと、また、7月は学期末テスト前という条件に起因していると考えられる。

#### 3.2. 言語別参加学習者数

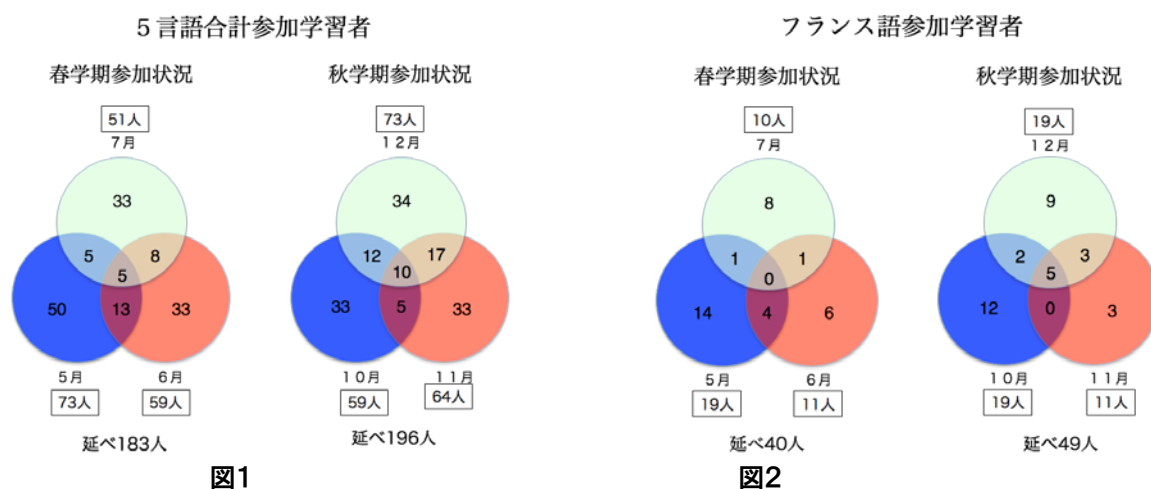
言語別に見ると（グラフ2）、春、秋合計参加学習者延べ人数が最多であったのは、フランス語の89人。続いてスペイン語84人、ドイツ語80人、ロシア語64人、中国語62人となっている。当然のことながら、当該言語の授業履修者数は言語によって大きく異なる。2016年度の場合は次の通りであった。西：741、中：723、仏：653、独：555、コリ：335人（CLER提供）。ロシア語は、履修者数が中国語の半数以下であるにもかかわらずL.E.参加学習者数が中国語を上回り、フランス語は、スペイン語や中国語に比べて履修者数が少ない中、参加学習者は最多であった。また、この2言語は学



\* 延べ人数：2回参加した学生は2人と数えている

習者数が春学期に比べて秋学期に大きく増加しているのが特徴である。

### 3.3. リピートした学習者の割合



春、秋それぞれの参加学習者数は、5言語合計で見ると（図1）、延べ183人と196人で、大きな差はなかった。その月のみ参加した「新規参加学習者」は、初回の50人を除き、毎回33、34人で安定していた。それに対し、リピーターの数は秋学期に増加している。

フランス語の場合は（図2）、春から秋にかけて参加学習者数が40人から49人に増加した。新規参加者は春28人から秋24人に減少していることから、延べ人数の増加はもっぱらリピーターの増加に起因することがわかる。

そこで、どのくらいの割合がリピートしているのか知るために、リピートした学習者の割合を出した（リピートした学習者の割合 = リピートした学習者の延べ人数 ÷ 参加した学習者の延べ人数）。その結果、フランス語では、春30%、秋51%で、秋学期にリピートした学習者の割合が高くなっていることがわかる。5言語全体で見ても、春37%、秋50%で、リピートした学習者の割合上昇はほとんどの言語に共通した傾向であった。このことから、参加者にL.E.がある程度定着してきた様子がうかがえる。

また、各言語において学期をまたいで4回以上のリピートや、複数の言語のセッションに参加した学生が若干いた。学生数が少ない大学で、各言語1-2名でもこうした学生を確認できたことで、ニーズに応えている手応えを感じた。熱心な学生の可能性を最大限伸ばせるような環境の拡充を目指したい。

### 4. アンケート結果

2015年11月からアンケートを実施した。フランス語に関しては75%以上の学生が外国語と日本語を使っての交流が「とてもよくできた」「できた」、同様に75%以上の学生が「満足」と答えた。実施時間については「やや短い」が過半数を超えた。頻度についてはほぼ全員が月1回を希望した。他言語の結果においても同様に、学生の満足を示す結果が見られた。頻度も月1回が圧倒的多数となった。

2016年度5月のフランス語のアンケート結果でも、外国語や日本語を使った交流に関して違和感を感じた学生は見られなかった。一方、ドイツ語も同様だが、中国語、韓国語、イスパ

ニア語に比して、フランス語では学生の比率に対する不満が見られた。留学生の総数が少ない、授業外活動に参加する学生がさらに少ないなどの事情があるが、留学生参加数確保が課題となった。7月のアンケートでは、事前申し込み不要の当日参加を全員が希望した。学生側も、その方が負担を感じないのであろう。

### 5. 終わりに

今後のL.E.の回数に関しては最低でも月1回、そして毎週火曜の昼休みはフランス語で交流できるというのが学内で定着できれば理想的だが、週1回となると教員が介入せず学生とTAのみでの運営が必要となるだろう。活動が学生主導で自律的なものとなるように、今後の準備を進めていきたい。フランス語の場合は留学生数が少ないという状況があるが、それにどう対処するかが課題といえる。2016年度に優秀なフランス人TAのサポートのおかげで円滑な活動ができたが、こうした優秀なTAの確保は重要である。また、フリートークを撮影したビデオを見ると、多くのテーブルでフランス語母語話者の留学生が会話の主導権を握っているが、中には積極的に参加して発言回数が多い日本人学生も散見される。そのほとんどが留学経験のある学生やフランス語学科の学生であるが、彼らは会話の牽引役を引き受け、第2外国語学習者の到達目標やロールモデルを体現しうる有意義な役割を果たし、留学生数の少なさを補う貴重な存在とも言える。彼らの存在の意義も問い直していきたい。

最後に、大学生の現状に合わせたTwitterの活用として、現行のL.E. 予告に加え、参加者の感想等のフィードバックを発信するなど、CLERのTwitterをより充実したツールとして活用していきたい。あらゆる方面から学生にモチベーションを与え、実践のニーズを叶える機会を少しでも増やしていけたらと願っている。